

中国の行動派フェミニストとインターネット

遠山日出也

以下は、4月例会の私の報告の概要です。

一 若い行動派フェミニストの運動・その後

本題の前に、『年報』の拙稿「中国の若い行動派フェミニストの活動とその特徴」執筆後の事件をいくつかご紹介させていただく。

1. 就職の男女差別について

『年報』でご紹介した、曹菊^{ツァオジュエ}が起こした、求人男女差別を訴えた中国初の裁判は、昨年12月、会社が謝罪し、3万元(約50万円)を支払うことで和解が成立した。この裁判は、訴訟を裁判所に受理させるまでに約1年かかった。中国では、民事訴訟でも、訴えが裁判所に受理されないことがよくあり、受理させるために、さまざまな活動がおこなわれた。たとえば、昨年5月、114名の女子大学生が連名で北京市の人民代表大会などに対して、訴訟を受理させるよう求める書簡を送った。

2. 女子学生に対する性暴力について

昨年、学校教師などによる女子学生(生徒)に対する性暴力事件が次々に発覚した。フェミニストたちは、この問題について、さまざまな運動をおこなった。その中の一つをご紹介しますと、この件について教育部(日本で言う文科省)・公安部(警察庁)・中華全国婦女連合会という体制側の組織が、連名で、女子学生の性被害防止のための通知を出したのだが、その中に、「女子学生に警戒心を高めさせ、外出時はできるだけ連れ立って出かけさせ



る」「寮で夜間の点呼をし、帰っていない者を報告する」という個所があった。それに対して、若い女性たちは各地の街頭で、パフォーマンスアートをおこなって抗議した。それは、上の写真にあるように、1人の女性が板で囲まれた狭い空間にしゃがんで、「強姦犯を閉じ込めろ! 私を閉じ込めるな!」と書かれた、漫画の吹出しの形のプラカードを掲げるものである。女性を囲んでいる板には、「閉鎖的の校舎」、「夜間の点呼」と書かれており、写真に写っていない裏の2面には、「一人での外出」「夜道を歩く」という文言に×印を付けたマークが書かれている。後ろに立っている女性は、「性侵害に反対する、女子学生に自由を!」というボードを掲げて、女性の自由を奪うことの不当性を訴えている。

3. 社会的マイノリティとの連帯を広げた

第一に、セックスワーカーとの連帯である。

『年報』の原稿では、若いフェミニストたちはセックスワーカーの人権に関心を持ってはいるが、具体的なアクションは起こしてこなかったと述べた。しかし、今年2月、中国中央テレビが、広東省で売買春が蔓延している状況を放送したとき、多くのセックスワーカーの顔がわかる画像を放映したのに対して、北京・武漢・広州の街頭で、若い女性が、3～5人ずつ、「セックスワークも仕事だ。セックスワーカーにも尊厳がある」というプラカードを掲げ、モザイクをかけた顔写真のお面をかぶって抗議をした。女性NGOもこの問題についてシンポをした。従来から、セックスワーカー支援団体はセックスワーカーの人権について訴える活動をしてきたのだが、彼女/彼らの人権問題が起きた時に、フェミニズム団体がすぐにこうした活動をしたのは、初めてだろう。

第二に、農村の女性とも連帯を始めている。「出嫁女(嫁に行った女)」(結婚後も、夫の村でなく、自分の村に住み続けている女性[夫は婿入り])には、しばしば村が土地を分配しないという問題が起きている。これは、個人でなく家族が土地権を持っていて、土地が父系で相続されるためだが、「出嫁女」たちも合宿に参加したり、自分たちの問題を訴えるパフォーマンスアートをしたりした。

第三に、性的マイノリティとの関係については『年報』で述べたが、その後、行動派フェミニストの知識人である呂頻リュウビンとクィア系の人々がネット上でさまざまな点について議論(討論)をしている。

4. 当局の弾圧

昨年8月、行動派フェミニストは、広州で「herstory maker 行動力育成夏令營サマーキャンプ」とい

う合宿をしたが、その2日目に、ホテルが公安当局に圧力をかけられて、会議室を提供するのを断り、他のホテルも圧力をかけられて彼女たちの使用を断った。彼女たちは、公安の尾行を撒いて、郊外の農村部の小さな旅館に移動して合宿を続けたが、移動中のバスの中でも講義するなどゲリラ的に活動した。

二 中国の行動派フェミニストとインターネット

以下は『年報』の拙稿と重複する箇所もあるが、ネットの活用という点からまとめた。

1. 陳亜亜チェンヤヤの指摘と彼女のフェミニズムサイト

2008年、陳亜亜(上海社会科学院研究員だが、フェミニズム運動にも関わっている)は、中国のフェミニズム系のウェブサイトには、以下のような問題があることを指摘した。

・「現在のフェミニズムサイトのほとんどは(…)まだ web1.0 段階(情報の送り手と受け手が固定されている状態)にとどまっていて(…)双方向的な交流が非常に乏しい」。

・主流のフェミニストのサイトは、「周縁の女性グループ」(セックスワーカー・レズビアン・トランスジェンダー)を軽視している。

そうした指摘をしただけでなく、陳は自ら「女権在線フェミニズムオンライン」という、以下のような特徴を持ったサイトを開設した。

・ユーザーが自由に書き込みや投稿ができる(掲示板への書き込み以外は、審査あり)。

・性的マイノリティ(「lesbian」「クィア文化」)のコーナーを設置した。

・ML、チャットグループを設置した。

2. 微博ウェイボ(≒twitter、2010年頃～)の活用

上の「女権在線」^{フェミニズムオンライン}はホームページだったが、2010年頃から、「微博」^{ウェイボー}というtwitterに近いものが登場し、それを若い行動派フェミニストは駆使している。そのリーダーの1人である李麦子^{リーマイズ}は、人人網^{レンレンワン}(=facebook)は「親しい友の場」なので「得られる情報が非常に限られており、現実から遊離しやすい」が、「微博は[オープンな場だから]市民社会を推進している」と述べている。

彼女たちは、個人個人が、この微博を、携帯電話からも発信して活用している。微博には、双方向性も、twitter同様、もちろんある。なお、微博は、制限字数はtwitterと同じ140字だが、同じ字数でも、中国語は漢字なので、twitterより多くの内容が書ける。また、微博には「長微博」^{チャンウェイボー}という長文を画像の形で添付することも可能である。それゆえ、日本で微博と同様のことをするには、twitterだけでなくブログ、場合によってはfacebookと併用することが必要であろう(実際、中国でも多くの人はブログと併用している)。

中国のフェミニスト活動家や女性団体はおおむね微博をしており、ブログをやっている比率も高い。

発信の内容は、活動報告、イベントの告知、ニュースや生活から感じたこと、記事の転載、意見の交流、疑問に答える、性差別的意見に対する反論、会社に抗議する、役所に出した質問状への回答を公表するなどさまざまだが、微博の機動性を生かして、現場から報告をしている人もいる。たとえば、DV防止法の署名を全人代などに届ける試みをしたときには、当日の状況を刻々と8回に分けて報告した。また、『年報』^{リーヤン}でご紹介した李陽のDV裁判についても、現場から報告している。

相手方の対応を報告することもある。李陽

の会社のスタッフがDVに対して抗議をする人々に暴力をふるったことがあったが、その際は、その状況を現場から4回に分けて報告し、そのビデオも投稿した。

パフォーマンスアートも、ビデオに収録して発信するという形で動画を活用している。

また、行動派フェミニストは、グループとして、ホームページと掲示板、および内部で話し合えるSNSやMLも持っており、重層的にネットを活用している。

3. ネットからうねりを巻き起こす

「男子トイレ占拠」などは、当初からマスコミが取り上げたが、以下のように、ネットからうねりを巻き起こした活動もある。

(1)上海地下鉄の痴漢問題

2012年6月20日、上海地下鉄の微博の公式アカウントが、下着や足が透けて見えている服装をした女性の乗客の後姿の写真を掲載して、「こんな恰好をしたら、痴漢に遭わないほうがおかしい。娘さん、自重してください」と発信し、それに対してフェミニストらが微博などで抗議した。その際、「女性メディアウォッチネットワーク」というNGOのアカウント「女権の声」(現在、フォロワー数約3万3000)が上海地下鉄への抗議を呼びかけるとともに、関連する論説なども刻々と紹介した。もちろん団体のアカウントだけでなく、さまざまな女性が自分の言葉で上海地下鉄を批判した。さらに、そうした批判の声を、「セクハラと服装とは無関係」というハッシュタグを作って集約した。

6月24日には、地下鉄内で1人の女性が全身を黒いベールで覆って、「涼しさは欲しいけど、痴漢はいらない」と書いたパネルを持ち、もう1人の女性が、乳房の形をした器

を二つ胸に付けて、「私はふしだらでもいいが、痴漢はいけない」と書いたパネルを持つというパフォーマンスアートをおこなった。その1人が、微博で2人のパフォーマンスアートの写真を発信し(下)、多くの人が拡散した(それぞれ2445回、2177回転載)。



また、「女権の声」は、他のネットユーザーに対しても、「一人一枚の写真で、セクハラ反対を訴える」というハッシュタグを付けて、メッセージ付きの写真を微博で発信するように呼びかけた。

(2)DV 防止法 1万人署名運動

これは、実効性のあるDV防止法を求める署名運動で、中国では女性運動史上空前の1万2000人の署名を集めた。もちろんオフラ

インでも集めたが、オンラインで集めたものも半分程度あった。この運動においては、微博に自分の上半身裸の写真を掲載して、署名を呼びかける活動もおこなわれた。この活動は15人がやった。これには人目を引くという目的もあったが、後述のように、女性の身体の自主権を訴えるという目的が大きかった。彼女たちの写真付きの訴えは、多く転載され、1000回以上転載された人も複数いる。

4. 双方向性

微博の双方向性は、第一は、転載(リツイート)しつつコメントを付けることで、これはtwitterと同じである。第二に、微博にはコメント欄もあり、この点はtwitterと異なる。

具体的には、以下のような形で双方向性が発揮されている。

第一に、拡散、つまり転載することによって情報や意見を広げた。

第二に、支持・激励で、全体としてはこれが多い。たとえば、上半身裸の写真の署名の訴えに対しては、「署名した」、「署名を支持する」、「美しい」、「勇敢だ」といった反応があった。『年報』でも触れたが、「男子トイレ占拠」のアクションをめぐる^{ジョンチューラン}鄭楚然は微博で、「多くの人身攻撃と漫罵に耐えている。。。。。。」とつぶやいた。そのコメント欄には2、30人が激励を書き込み、交流がなされた。「がんばって〜」という単純なコメントもあったし、他にも、たとえば「民主主義のルールでは、過半数の票を取ればいい。残りのはかってにやらせておけ」というコメントもあり、それに対して、鄭は「わかった!!!!!! そんな理性的な話を聞けてとてもうれしい〜」と答えた。

第三に、さまざまな交流をする中から、新

しい仲間を見つけた。

第四に、批判や攻撃、疑問に対して応答することである。一つは、本人が個別に回答・反論する場合で、たとえば「DV 反対のために、なぜ裸になる必要があるのか？」という疑問が出たが、それに対しては、^{シアオテイエ}小鉄は、「みんな女の体は、公にしてはならないと思っている——哺乳と男性に見られる場合を除いては。これは、問題があると思わないか。女性の身体には自主権がなく、権力によって支配されるしかないのか？」というふうに答えている。第二に、Q&A や反論の論説を出す場合もある。アクションによって反響は異なるが、否定的反響が非常に多い場合もある。たとえば、「私はふしだらでもいいが、痴漢はいけない」という写真にはコメントが 364 付いたが、その 7~8 割は否定的なものだった(「不公平だ」、「上海地下鉄のメッセージは、親切的な忠告だ」など)。こうした場合は、個別にはあまり反論せずに、「女権の声」が Q&A を作成したり、フェミニスト知識人が論説を出したりして応答している。第三に、『年報』でも述べたが、悪質な攻撃(罵倒、「強姦してやる」など)には、一人ではなくて、みんなで対処して、法的措置を取るぞ、などと言った。

第五に、疑問や批判に対して、本人でなく、別の人が応答して、議論を発展させる場合もある。たとえば、^{シアオメイニー}肖美膩の「平らな胸は光栄だ。DV は恥ずべきだ」と書いてある裸の写真(右上)に対しては、「平らな胸と暴力との関係がわからない」という疑問が多数寄せられた。それに対しては、『年報』でも書いたが、^{ファンビンツォーシェンクァン}@反瓶醋閑逛が、「DV と平らな胸を差別するロジックとは一致しており、いずれも男性の女性の身体に対する支配権を示すものである」「女性の身体は戦場であり、身

体の自主権は、DV 反対に体现されているだけでなく、平らな胸を自ら誇ることに体现されている」とコメントし、それに対して、肖美膩が「すばらしい」と返信し、他の多くの人も、上の発言を転載した。



こうして運動が広がって、女性だけでなく、男性も 1 人、「DV 反対には男性の参加が不可欠」という理由で写真を発表して訴え、トランスジェンダーの人も、「トランス差別と DV は、ともにジェンダー暴力だ」といった理由で、お 2 人が写真で訴えた。

5. 残されている問題

陳亜亜の 2008 年論文は、以下のような指摘もしているが、こうした問題は、まだあまり解決していない。

- ・地域的格差——貧困な中国の西部地区にはフェミニズムサイトはほとんどない。

- ・領域の分断——女性/ジェンダー学学科発展ネットワーク(女性学やジェンダー論の研究者のネットワークで、ホームページを持っている)の会員も、社会学が専門の人が 28.57% を占めており、自然科学のメンバーはほとんどいない。フェミニズムのサイトも、自然科学関係のものはほとんどない。

・男性の参与の不足——メンズリブのサイトは方剛^{ファンガン}の「男性解放サロン」というグループしかなく、それも現在は放置されている。

三 日本にも参考になる点はないか？

私は、中国の状況と比較すると、現在の日本のフェミニズムは、ネットで外部に自らの主張を発信すること(twitter、ブログ、ホームページ)が少なすぎるように思う。facebookは、考えの近い人どうして話し合える点はいいが、李麦子が言っているように、内輪のものになりがちなので、別に外部への発信もしなければならない。たしかに中国の場合、言論や出版の自由が少ない分、ネットが発達したという面はあるが、日本の状況を見ても、ネット上では右翼的勢力が幅をきかせていて、フェミニズムは劣勢である以上、もっと「攻勢」に出る必要があると思う。

しかるに、日本では、ブログやホームページをしているフェミニストは少なく、twitterも盛んとは言えない。

2009年にWANが発足したことはかなりの変化だが、WANには文化的な内容(本・映画・ドラマ・アート、エッセイの多く)が多く、それ自体は有意義だが、バックラッシュや性差別を正面から批判する記事はわりあい少ない(でも、アクセス数が多いのはそうした記事である)。WANは、さまざまな団体が活動を広くアピールする場にもなっているが、もっと個人(とくに若い方?)が自分の主張を出すことも必要ではないか。

日本でも、上海地下鉄事件のように、ネット発の運動がうねりを巻き起こすことはできないだろうか？ 2009年には、曾野綾子氏が産経新聞に、痴漢を被害者のミニスカートのせいにするコラムを書いて、それに対し

てさまざまなブログが反論したことがあったが、最近、ブログは衰退気味である。

女性団体のtwitterやブログも、「女権の声」のように、ネット上で運動を起こす役割は果たしていない(フォロワー数も1/10以下)。ネット発信自体をしていない団体もある。

手法という点から言えば、中国と同じように、以下のようなことができないだろうか。

・twitterでは、現場から発信するとか、相手側の対応を発信するなど、機動性を生かした発信がもっとできないだろうか？ また、ハッシュタグを使った活動をもっとできないだろうか？ 他の社会運動ではこれらのこともおこなわれているが、女性運動には少ないように思う。

・twitterなどに個人が自分の写真とメッセージを掲載することによって意思表示するやり方は、中国に限らず外国でよくやられているが、そうしたやり方をできないだろうか？ (facebookでは、アジア女性資料センターが少しやっておられるが)。

・動画の活用という点では、V-WANが韓国水曜デモ1000回アクションなどを報じてきたが、ほかの団体や個人も、もっと動画を活用できないだろうか？ また、全体としてはシンポジウムの動画などが多いが、ビジュアル的にインパクトのある動画を何か発信できないだろうか？

・双方向性をもう少し活用できないだろうか？ 双方向性は、twitterやfacebook、ブログのような個人発信をしているか否かある程度関係がある。ただし、団体の場合も、WANサイトにコメント欄(荒らしもなく安心できる)が付いたという前進がある。

もっとも、日本のほうが中国より条件が有利で、到達点が高い面もある。第一に、フェ

ミニズムの思想的・学問的・文化的蓄積が厚く、研究者の層も厚いので、たとえば、WANにおける本・映画の紹介、ミニコミ図書館、教養豊かなエッセイのようなものは日本のほうが多い。第二に、日本のほうが、ネット上に、民族的マイノリティの問題、屋外の集会、スト・団交などの労働運動を掲載しやすい。こうした点はさらに生かしていきたい。

なお、以下のような点は、日中共通のインターネットの弱点だろう。

・自然科学系の女性研究者との分断——自然科学には女性研究者自体が少ないが、それ以上にネット上で存在が感じにくく、たとえ自然科学系の方がネットで発信なさっている場合でも、自分たちとはネット上でつながることがあまりできてないと思う。

・フェミニズムサイトとセックスワーカー、レズビアン・トランスジェンダーとの分断——『女性学年報』や『女性学』にはセックスワーカーやレズビアンに関する論文がよく掲載されているが、インターネットのウェブサイトでつながりや、運動でつながりという点はやや弱いと思う(twitter や facebook で繋がっている方はいらっしゃるが[自然科学系の人とも、同じだろう])。

・メンズリブ的な発信が弱い——日本も同様であり、男性としてとくに責任を感じる。

以上述べたことの中には、私自身が努力している点もあるが、私自身もまだ漠然とした展望しか持っていない点も多い。しかし、今回は、とりあえず中国の運動を見る中から私を感じたことを述べさせていただいた。

また、例会では、男子トイレ占拠(2012年2月)、血染めのウェディングドレス(2月)、上海地下鉄(6月)、李陽 DV 裁判支援(8月)、北京地下鉄での《ヴァギナ・モノログ》(1

1月)のパフォーマンスアート等の動画もご覧いただいた。これらの動画や彼女たちの運動に関する拙ブログ記事は、拙サイトの中の「『ジェンダー平等唱導・アクションネットワーク』(中国)年表」<http://genchi.yamanoha.com/xdp.html> にリンクがある。

なお、『女たちの21世紀』の大橋史恵さんの連載「中国フェミの見聞録」も中国の若い行動派フェミニストの運動を取り上げている。大橋さんは、5月17日(土)14~16時、東京都文京区民センターで報告をなさる。

<資料について>

一「若い行動派フェミニストの運動・その後」については、拙ブログ「中国女性・ジェンダーニュース+」(<http://genchi.blog52.fc2.com/>)中の「就職の男女差別に関する初の裁判が和解——会社が謝罪、3万元を支払う」、「学校教師による性暴力と行動派フェミニスト——『強姦犯を閉じ込めろ、私を閉じ込めるな』」、「東莞のセックスワーカーに対するメディアなどの人権侵害についてのフェミニストらの抗議」、「農村での土地権侵害に対する『出嫁女』の闘い——陳情、デモ、裁判、インターネット、パフォーマンスアート」、「ジェンダー平等活動グループの合宿に対する当局の妨害と『herstory maker 青年女性行動力育成計画』」の各エントリ参照。写真の出典は「“关强奸犯！别关我！”」女声网 2013年10月10日 <http://www.genderwatch.cn:801/detail.jsp?fid=303149&cnID=90020>。

二「中国の行動派フェミニストとインターネット」については、引用した陳亜亜の2008年論文は、「网络的力量：女性主义者跨界合作的新途径」麓山楓 2008年9月8日 <http://www.38hn.com/article.asp?id=1910>。また、写真の出典は、最初から順に、想起的花开的微博 2012-6-24 12:23 <http://weibo.com/1667393761/yplMZADeo>、想起的花开的微博 2012-6-24 12:29 <http://weibo.com/1667393761/yplPq1s8N>、女权之声的微博 2012-11-13 16:52 <http://weibo.com/1740974192/z50MC8j3R>